



幸田露伴「蒲生氏郷」論

川西, 元

(Citation)

國文論叢, 26:44-61

(Issue Date)

1998-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81011818>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011818>



幸田露伴「蒲生氏郷」論

川 西 元

一 語り出しの問題—歴史叙述の二つの時間

いかなる歴史叙述においても、そこには叙述行為がなされる時間と叙述される内容の時間が考えられる。前者は往々建前として隠蔽されるが、その存在自体は否定できない。こうした当たり前のことを言うのは、幸田露伴作『蒲生氏郷』（大正十四年九月）が、この時間の二重性をつとめて明示的に露呈させる形で出発している点が注目されるからである。

大きい者や強い者ばかりが必ずしも人の注意に値する譯では無い。小さい弱い平々凡々の者も中々の仕事をする。（中略）。蠅といへば下らぬ者の上無しで、漢の班固をして、青蠅は肉汁を好んで溺れ死することを致す、と笑はしめた程の者であるが、（中略）其の逐へば逃げ、逃げては復集まるさまは、片倉小十郎をしてこれを天下の兵に擬へて、流石の伊達政宗をして首を俛して兎も角も豊臣秀吉の陣に参候するに至るだけの料簡を定めしめた。微物凡物も亦是の如くである。本より微物凡物を軽んずべきでは無い。そこで今の人が好ん

で微物凡物、云ふに足らぬやうなもの、下らぬものの上無しといふものを談話の材料にしたり、研究の対象にするのも、まことにおもしろい。

「まことにおもしろい」などと云いながら、「蚤のやうな男、虱のやうな女が何様致した、彼様仕つた」と、当時の私小説を冷やかにすらしい言葉がこれに続く。また「古い人を新らしく捏直して、何の拠り所もなく自分勝手の絲を疝気筋に引張りまはして変な牽絲傀儡つりごんぎまわを働かせ、芸術家らしく乙にすませ」という発言には誰しも芥川あたりを思い浮かべようが、まず見たいのはこうした文学状況を一端に含む語り手の所属する〈今〉に関わる叙述と、歴史内容との間の連続される様子である。引用部では蠅からの連想で政宗家臣片倉小十郎の逸話が紹介され、「微物凡物も軽んずべきでは無い」ことから、〈今〉の人のことが語られている。連鎖的に接続される形式の中で、大正十四年という語り手にとっての〈今〉と、歴史的時間とが自由に往還される言説である。これは〈今〉を出発点に置く語り出し方が強く打ちだされている特徴と対応しよう。例えば「今が、あながち太平の世でもない」と語り出

された段落は、「永祿、元亀、天正の頃は、とても今の者が想像できるやうな生優しい世では無かつた」という戦国の「何も彼も滅茶々々」な時代に読者を導き、他人の土蔵を口約束で賭け物にするひどい博打の話（『塵塚物語』）や、それと拮抗するようにしたたかな民衆の態度を話題にする。〈今〉から滑り出す形で蒲生氏郷の〈頃〉は語り出されていた。

現に今語らうとする蒲生氏郷は、豊臣秀吉即ち当時の主権執行者の命によりて奥羽鎮護の任を帯びて居たのである。しかるに葛西大崎の地に一揆が起つて、その地の領主木村父子を佐沼の城に囲んだ。そこで氏郷はこれを援けて一揆を鎮圧するために軍を率いて出張したが、途中の宿々の農民共は、宿も借さなければ薪炭など与うる便宜をも峻拒した。これ等は伊達政宗の領地で、政宗は裏面は兎に角、表面は氏郷と共に一揆鎮圧の軍に従わねばならぬものであつたのである。

この大正の〈今〉から天正の〈頃〉に移行していく語り出しは、歴史叙述の基点があくまで語り手にあることを形式上表明する。基点性は〈今・ここ〉の現場性でまさに語ろうとする主体の側にあって、彼に物語られることにおいて歴史は立ち現れている。

細かいことを語る人は今少なく無い。で、別に新しい発見やなんぞが有る譯では無いが、たまの事であるから、沸つた世の巨人が何様なものだったかと観たり語つたりしても、悪くはあるまい。蠅の事に就いて今挙げた片倉小十郎や伊達政宗に関連して、天正十八年、陸奥出羽の鎮護の大任を負はされた蒲生氏郷を中心とする。

細かいことを語る他の今の人とは違い、過去の「巨人」である

氏郷について「夜涼の縁側に団扇を揮つて放談するといふ格で語らう」とされる。この語り手の顔つき・身体つきを想起させる物語る態度の表明も時間的・二重性の明示化という事態と対応している。連想から滑り出す語り口は作中一貫して現れるから、後になつても例えば政宗や氏郷の立派さを述べべくだりて、思い出したように当世の若者のふがいなさにとぼつちりが行く。これは「今の若い者」に過去の武将のように強く生きるよう挑発する語り手である。この愛情込めて叱咤激励する態度は、彼らに対して人生の先達としてのもの、つまり「老大家」露伴その人の姿に重ね合わされることが予定された人物として仮構されていたのである。

もう一点最初に確認したいのは、ここで立ち現れる天正の〈頃〉が、いかなる時代として語られようとしているかである。今の引用に「沸つた世」とあつたように、煮え沸る湯のイメージがそこに付与されている。それは「黴菌のうよづくに最も適したナマヌルの湯のやうな時」や「冷くて活気の乏しい水のやうな代」という他の水イメージと対比的に使われていた。露伴は水に対し殆ど原初的感情に近い強烈な関心を持っており、それは作家の想像力の基層的フレームの一つだったと云つて良い。作中何度も繰り返されるこの時代イメージは「何れも是れも「力の発動」に任せられてゐた世」とも言い換えられる。沸騰する湯において水の分子が激しく運動・衝突し熱を帯びているやうな時代なのである。

もちろん秀吉を「実に混乱から整理へと急いで、譬へば乱れ垢づいた髪を齒の疎い丈夫な櫛でゴシ／＼と搔いて整へ揃へて行くやうなことをした人」と評する作家は、天正期が戦国の終焉を迎

えつつある時であった点も承知している。豊臣政権の天下統一のまさに遂げられようとする近世への転換期だったのである。そこで推し進められたのは石高知行制という統一原理による全国支配であり、その安定化を図るための兵農分離策である。前者を基礎づけたのが太閤検地、後者の具体的現れが刀狩令であった。作中ではこのどちらも記されないが、これは敢えて語られないものだろう。今一般論レベルで確認できるのは、作品の主舞台となった奥羽が、いわば「最後の戦国」であった事実である。いまだ分国的な独立性の強い統治のなされていた後進地の土豪勢力にとって、天下統一事業の進展は、自らの自立的村落支配を否定するものと映ったのだった。先立つ九州平定や本作の奥羽平定が土豪層の一揆の抵抗にあつたのは、かくなる社会構造的背景による。

自由な滑り出しの連想結合で織りなされる本作は、作爲の痕跡を見事に消去している。だがこれまでの引用に氏郷奥羽鎮護の任におけるエピソードや、「兎も角も」秀吉側について政宗が「裏面は兎に角、表面は」氏郷と共に一揆を鎮圧しなければならなかつたといった風の、彼の下心をほのめかす言葉があつた。つまりこの一見放談的に戦国の世の有様を語る過程の中で、さりげなく政宗・氏郷の奥羽での対立関係を暗示する配置がなされていたのである。律儀で峻厳な氏郷と不気味にしたたかな政宗という二つの「火の玉だましひ」の好取組を中心軸に展開する作品の種子が、ここにすでに提示されているのだった。

二 連環する時間構成

次に作品の時間構成の分析から、巨視的な見通しを与える作業

を試みよう。「蒲生氏郷を中心とする」と宣言はされたものの、実際に氏郷が中心になるのは叙述がかなり進んでからである。政宗・氏郷の両役者が揃うまで、本文は小田原の陣の周囲を巡り展開する。「周囲を巡り」と云つたのは、この陣について作中何度かその名があがりながら、それ自体について殆ど何も語られないためだ。もちろん歴史を物語ることは事象を選択し、除外する事でもあるから、叙述者のモチーフと関係が薄い際、省略や要約化がなされるのは常のことではある。小田原の陣が語られないのも、直接には両者の対立の中心プロットに重要でないがためだろう。だがそれはただその要求によるものでしかないのだろうか。

既述の秀吉を櫛に喩える箇所で「ところが結ばれた毛の一トかたまり引ッコ抜いて終へ、と天下整理の大締の下に四十五箇国の兵を率ゐて攻下つたのが小田原の陣であつたのだ」とその名が出た後、すぐに話題は政宗に移り十八歳での家督相続のことを語つて「それから、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四と、今年天正の十八年まで六年の間に」云々と続いている。注意したいのは小田原の名の後に「今年」と云う時間基点を示す言葉が置かれて点である。つまり「小田原の陣」は歴史内容の時間基準といつて良いのであるが、それでいてこの「語られなさ」の度合いはいかにも不自然に感じられるはずである。

小田原の配置の様子は時間構成の整理で観察可能となる。次の〈表1〉を見て貰いたい。ここで事件は時間構成と関連の深いもののみを選んだ。歴史内容が時間的に遡り語られる箇所での後説法的基準、つまり事件の歴史的展開の時間序列の切断面で分節化した場合、作品の構成要素を七つのシークエンスと見做すことが

<表1>

全集頁	西暦/月/日	事件内容
<p><1> 枕</p> <p>↓193 1590/3/18 政宗と景綱。蠅の逸話。)</p> <p>↓197 1590/10/ 葛西大崎一揆。)</p> <p>↓197 1590/11/8-17 伊達領通過。土民の冷遇に逢う)</p> <p>△199 1590/3-7/ 小田原の陣</p>		
<p><2> 政宗登場、その生い立ち</p> <p>・199 1584/12 政宗家督相続（十八歳）など</p>		
<p><3> 北条家の由来と盛衰</p> <p>・201 1491/ 北条早雲伊豆に入る</p> <p>・202 1562/4/末 麦飯の炊き方を知らない氏政</p> <p>△203 1590/3-7/ 小田原の陣</p>		
<p><4> 政宗小田原参陣まで</p> <p>・203 1584 /4/以降 正宗の秀吉との交渉始まる</p> <p>↑213 1590/3/18 政宗と景綱。蠅の逸話。)</p> <p>・213 1590/6/5 正宗小田原着。底倉蟄居</p> <p>△217 1590/7/6 小田原の陣（開城）</p>		
<p><5> 氏郷登場</p> <p>・218 1590/8/9 秀吉会津に入る</p> <p>▲219 1590/8/17 秀吉氏郷を会津に封ずる</p>		
<p><6> 氏郷の生い立ちとその人物</p> <p>・223 1556/ 氏郷出生</p> <p>↓234 1592/ 秀吉朝鮮出兵。氏郷上京（紀行）</p> <p>↓234 1595/2/7 武將の風流。辞世の句のこと</p> <p>↓234 1592/ 武將の風流。氏郷紀行文のこと</p>		
<p><7> 氏郷政宗の対立から氏郷の死まで</p> <p>▲236 1590/8/17 秀吉氏郷を会津に封ずる</p> <p>↑242 1590/10/ 葛西大崎一揆。)</p> <p>↑258 1590/11/8-17 伊達領通過。土民の冷遇に逢う)</p> <p>・282 1591/4/夏頃 九戸の乱</p> <p>↑289 1592/ 秀吉朝鮮出兵。氏郷上洛)</p> <p>↑289 1592/ 那須野の歌（紀行）)</p> <p>↑292 1595/2/7 辞世の句について)</p>		

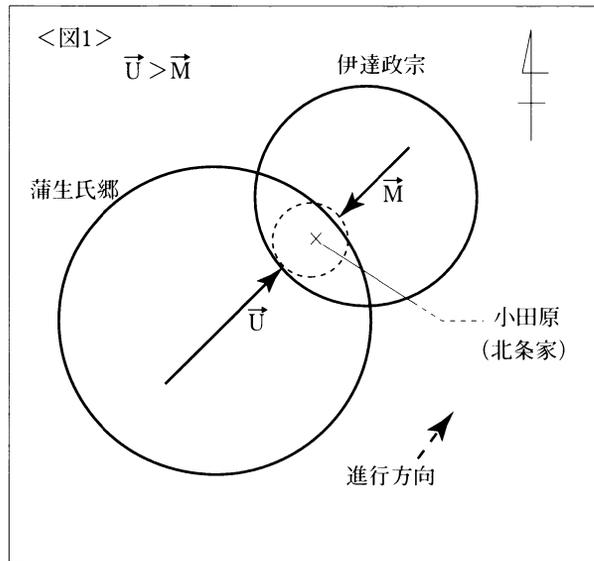
△▲:結び目機能を有する場所提示 / ↓:先説 ↑:↓を受ける再説

出来る。その包含関係を太線で左端に示した。例えば〈3〉北条家に関する叙述は、政宗の登場（〈2〉）から参陣（〈4〉）までのシークエンス（以下〈2〉〈4〉と記述）に割り込み、言説上は包含されているわけである。

さて問題の小田原は△で示したように各要素の繋ぎ目に置かれている。戦国のひどい世に対する評語や早雲以来の北条家史への脱線から、話を本筋に戻す所に現れているそれは、いわば話題を連結する役割を果たしている。これは結び目として機能する場所と云えるのではないか。

露伴を「強烈な空間感覚を具えた作家」と評したのは篠田一士である。問題は場所に関わるため、この小田原の機能面を確かめるため有効なのは、一種の空間図式性の中において、登場人物の位置づけを俯瞰することである。「火の玉」の喩えに従って人物は円で示す。その大きさは氏郷・政宗・小田原家それぞれが中心的に語られる叙述量の大小で段階づける。さらに先に示した包含関係に沿いつつ、小田原を結び目に置く形で空間的に反映させれば、いわば時間構造を空間方向に射影したものに相当する、次の〈図1〉が獲得される。

ここに「いつまで奥羽の邊鄙に鬱々として蟠居しようや、時を得、機に乗じて、奥州駒の蹄の下に天下を蹂躪してくれよう」と野望を抱き南下を目指す、戦国性を具体的に象徴化した人物である政宗の力（ \vec{M} ）と、それを阻止し押し戻そうとする統一権力を代表する氏郷の力（ \vec{U} ）を想定してみよう。すると本文中で器量の大きさが強調される氏郷、それと張り合い押される政宗という作品内容が、この空間図式に一致する。あたかも人物のエ



ネルギー量が、叙述の分量に暗示されているが如きである。作品空間を二力のぶつかる場と見なすことで、登場人物群の運動を力学法則的モデルで解釈できよう。つまり舞台の進行過程を \vec{U} の強大さによって、小田原から会津、葛西大崎、九戸へと北上していく様子と見做されるわけである。小田原は出発点における激突の中心にある。いわば氏郷政宗の因縁が成立し、二者の対立のダイナミズムを発動させるために要求された場所なのだと言える。

もちろん話が本筋に戻る際に空間性が改めて提示されることは、それ自体自然なことである。〈表1〉に▲で示した会津もへ7〉部の冒頭「さて話は前へ戻る」とある後で、氏郷の会津拝領が再説されている。だがそこには会津での逸話が續いていた。対して小田原の方は何も語られずに、三度目の登場の時「小田原は果して手強い手向ひもせず、埒も無く軍気が沮喪して自ら保てなくなり、終に開城するの已むを得ざるに至つた」とされて早々に舞台を降ろされてしまう。物語内容はそれを中心に置くかのように進行しながら、物語言説としては無視されている格好なのだった。

歴史は叙述者の関心や思惑に左右される。例えば大正九年の『平将門』で、将門が夙に謀反の心を抱いていたとされるのは『神皇正統記』によることを述べた後、「正統記の作者は皇室、尊崇の忠篤の念によつて彼の著述をしたのであるから、将門如きは出来ただけ筆墨の力によつて對治して置きたい餘りに、深く事実を考ふるに及ばずして書いたのであらう」としているように、それは露伴自身意識する所であった。こうした思考に即するなら、この扱いが当時小田原の主人だった北条家に対する評価と連動していた予想を惹起させる。「手製の萬八」は無遠慮に加えない立場に立つ作家は事実の捏造はしない。だがその代わりに要約するのである。北条家について述べるへ3〉は、北条早雲伊豆入り以来百年のことをたった二頁で語る要約化の甚だしい言説なのだった。語り手の初代早雲への評価は高いが、当代の氏政（正確にはすでに隠居）に対してはどうだったろうか。

で、早雲は好かつたが、其後氏綱、氏康、これも先づ好し、氏康の子の氏政に至つては世襲財産で鼻の下の穴を埋めて居

る先生で、麥の炊き方を知らないで信玄にお坊ツちゃんだと笑はれた。下女が乱暴に焚付を作ることまで知つた長氏に起つて、生の麥を直に炊けるものだと思つてゐた氏政に至つて、もう脉はあがつた。麥の炊きやうも知らない分際で、台所奉行から出世した関白と太刀打が出来るものではない。関白が度々上洛を勧めたのに、悲しいことだ、お坊さん殻威張りで、弓矢でこいなぞと云つたから堪らない。

叙述者の価値観は何を選び、どう配置するかに反映する。早雲が下女の不始末のような細かい点まで心が行き届いた（『北条五代記』という始祖らしい見上げた様子を示す逸話と、麥の炊き方も知らない（『甲陽軍鑑』お坊ちゃん化した子孫の逸話とが連続して語られる。百年間での家の衰えが決定的に印象づけられる配置であり、へたぎりたつた世〉にはへ生ヌル）化したこの家は減びて当然だという扱いである。また引用部が前節指摘したふがいない若者を挑発する声とエコーしていることも見て取れるだろう。氏郷などの「火の玉だましひ」と対照的な、取るに足らない「生ヌルだましひ」の代表として置かれている。小田原は、氏郷・政宗を関係づけるための空洞化された中心としての場だった。北条家は役者が揃い、その活躍の場を提供するための出汁に使われたようなものだったのである。

これまで見たのは通常の歴史叙述におけるのと大差ない観点からの分析だった。もう一度〈表1〉を見よう。実は本作における特徴的といつてよい仕掛けは、話題の連想的飛躍の形で配置された逸話が、後の事件に対する先説法的機能を持つ点にある。この基準に合致する先説言説を↓で、また通常進行の叙述で再び現れ

る箇所を↑で示した。右端に細線で示したのがその対応関係である。上述のシークエンスの環と別の環が形成され、二元的な時間構成をなす様子が観察される。これは言説操作において仮想的に現れる環である。左右を対照すれば分かるように、両者は見事な相互補完関係にある。つまりへ1―へ2へ4、へ6―へ5へ7―というように、逸話中に配置された先説（前振り）は、後のシークエンスに組み込まれる。二種の環が互いにズレつつ重なり合うことで緊密な鎖状構造がなされるわけだ。作品全体は前半政宗・後半氏郷中心の二つの大シークエンスから構成されるが、この操作は両者が別個の叙述である印象を拭い去り、全体を有機的統一に織りなす主要な要素の一つとなろう。露伴は作品構成に大変な努力を払った作家である。好き勝手な放談だという謙遜のポーズとは裏腹に、どのタイミングで話の前振りすることが安定した統一感をもたらすか計算し尽くして取り上げていたものに違いない。

だから前節で触れた〈今・ここで〉語る語り手を明示化させた構造から、強い担保が与えられていたといつて良いはずである。

三 〈據つて語る〉のは〈何に據る〉のか

歴史はいつでも広い意味での史料を材料とする。手妻の如く取り出される彼ら武将たちの事蹟は何に基づくものなのか。語り手は「おほよそは何かしらに據つて、手製の萬八を無遠慮に加へず、斯様も有つたらうといふだけを評釋的に述べ」と云う。ここで宣言されたものを以下〈據つて語る〉方法と名付けよう。それは〈何に據る〉かと、へいかに語る〉かの二つに方向化できる。前者は後者の前提であるから、作品に直接反映していると考えられる史料をまず見ていこう。それは多種にわたるが、そのうち作品の歴史内容、歴史的時間序列の枠組みを織りなすのに利用されている骨格的史料と呼べるものは何か。その点、先に結論を出しておく、政宗中心の前半（へ2へ4）では幕末の儒者齋藤竹堂の『（仙台）藩祖実録』である。また後半氏郷中心の部分（へ5へ7）は蒲生家臣神戸正望の『氏郷記』（史籍集覽所収）である。次の〈表2〉を見ていただきたい。これは両書以外のものに據る（後半での藩祖実録利用箇所を含む）と考えられる記事の一覧である。これほど他書が利用されているのなら、今の説も怪しくはないかとかえつて疑われようか。だが論者が当初作成した両書を含む表はこの三倍の分量があり、また●は氏郷中心部分で政宗のことを語るのに利用された『藩祖実録』（ちなみにへ2へ4）で『氏郷記』は使用されていない）であり、△は『氏郷記』の記述で事足りるが他書も参照にしたかと想像される程度のものである点を先

〈表2〉

区	分	年	号	西暦/月/日	全集頁	事件	利用史料
1	逸話	天文	不明	1470以前	196	博打の時他人の土蔵を賭ける人が居たこと 秀吉 醜字を忘れた佑筆に「大でよい」と云う	塵塚物語巻五* 老人雑話*(△名將言行録)
2	他家	延徳三年	1491	201	早雲 三略の最初を聞いても良いと言う 早雲下女の焚付の不始末にまで目が届く	野史 日本外史「後北条氏論贊」 北条五代記*「早雲寺殿二十一ヶ条」。	
3	他家	永祿五年	1562/4未	202	父飯の炊き方を知らない氏政	野史 甲陽軍艦。△日本外史	
4	他家	天正十三年	1585/10/8	208	父輝宗が奪われた時鉄砲を打ちかけ父殺される	野史 蒲祖実録	
5	補充	天正十八年	1590/6	208	視察者の大峰金七帰る	野史 (...と云はれてゐる)	
6	伝聞	天正十八年	1590/6	215	佐竹義宣 三成に訴え政宗を抑えようとする	野史 (...とされている)	
7	伝聞	天正十八年	1590/6	216	政宗 秀吉の底までは愛せないことを語る	野史 (...と云つた者があるといふことだ)	
8	伝聞	天正十八年	1590/6	216	政宗を山を出て来た虎に諭える	野史 老人雑話*。	
9	並置	天正十八年	1590/8/17	219	秀吉氏郷を会津に封じし際の諸説	野史 名將言行録*。△三河後風土記*。	
10	逸話	不明	不明	229	臆病者と言われた松倉権助を召し抱える。	野史 氏郷記*。	
11	逸話	天正十八年	1590/5/3	231	北条勢 広沢重信をして夜討ち	野史 氏郷記*。	
12	逸話	天正十八年	1590/7/2	231	北条勢 春日左衛門尉をして夜討ち	野史 氏郷記*。	
13	逸話	不明	不明	233	武將の風流(1)秀吉の連歌	*常山紀談	
14	逸話	不明	不明	234	武將の風流(2)正宗の漢詩・和歌	蒲祖実録*「附録蒲祖遺稿」	
15	逸話	天正二〇(文祿元)	1592	234	武將の風流(3)正宗の漢詩・和歌	氏郷記*。△蒲生氏郷紀行(氏郷記に全文引用故不要)	
16	逸話	天正二〇(文祿元)	1592	235	細川忠興佐々木の鎧を氏郷に所望 与える	蒲祖実録*(△名將言行録)	
17	逸話	天正二〇(文祿元)	1592	236	氏郷会津転封に泣く	野史 (△名將言行録/常山紀談)	
18	逸話	天正十八年	1590/8/17	237-239	木村家臣の乱暴狼藉(一)揆発生の要因	蒲祖実録	
19	逸話	天正十八年	1590/9/7	241	政宗 米沢城で毒餌にあいかける	蒲祖実録	
20	逸話	天正十八年	1590/4/6	265	政宗と將軍秀忠の会合	蒲祖実録	
21	逸話	寛永初年	1624/3/12	266	政宗と將軍秀忠の会合	蒲祖実録	
22	逸話	天正十六年	1588/2/	267	伊達対大崎の合戦(政宗大敗)	蒲祖実録	
23	逸話	天正十五年	1587/1/	267	須田伯耆 政宗の裏切りを密訴	蒲生氏郷記* + 野史 (+ 蒲祖実録)	
24	合成	天正十八年	1590/11/	277-279	正宗上洛(鶴鶴の花押の言ひ記)	野史 (△蒲祖実録。△三河後風土記*。	
25	逸話	天正十九年	1591/2/7	282	前田利家、政宗氏郷を取りまとめ	野史 利家夜話*	
26	逸話	不明	不明	283-288	政宗千金の茶碗を叩き壊す	野史	
27	逸話	文祿元年	1592	289	秀吉朝鮮出兵、氏郷上洛	氏郷記* (「紀行」全文引用)。△蒲生氏郷紀行	
28	逸話	天正二〇(文祿元)	1592	289	那須野の歌	氏郷記* (同上)。△蒲生氏郷紀行	
29	逸話	文祿二年	1593/6	289	大岡利家氏郷と共に渡海せんと云う	?日本外史	
30	逸話	文祿四年	1595/2/7	289-292	利家病死。死因についての考察	氏郷記*。△医学天正記*。	
31	逸話	不明	不明	291	利家蟲貞死。死因を示す二逸話	利家夜話*。老人雑話*。	
32	逸話	文祿四年	1595/2/7	292	辞世の歌について	野史(備前老人物語* (利休との絡み)。氏郷記* ?疑問(他史料の存在が想像される) △参照方(補助的な利用が想像される) *「史籍集覽」所収	
33	逸話	文祿四年	1595/2/7	292	辞世の歌について	野史(備前老人物語* (利休との絡み)。氏郷記* ?疑問(他史料の存在が想像される) △参照方(補助的な利用が想像される) *「史籍集覽」所収	

ず断っておく。また①③は北条家の記事のため他書利用は当然であり、〈逸話〉と記した歴史文脈から離れた箇所や、二書へ補充や合成(⑤②④)する形で採用が多いことも認めて貰えるだろう。この表になく、歴史の時間序列に沿って史実として扱われている事件の殆どは、基本的に二書に據るものと見て差し支えないのである。追々拾って行く事例から、そのことは理解されよう。

この表からいくつか特徴が拾い出せる。第一に『氏郷記』も含めて、『史籍集覽』所収のもの(記号*)が多い点が挙げられる。後年作家が『集覽』中の「雪タ、キノ事」という記事を見つけたら書いてやっても良いと編集者に吹っ掛け、「雪た、き」が成立したという逸話はよく知られている。いわば『集覽』は作家の自家薬籠中の物であった。もう一つ分かるのは飯田忠彦の『大日本野史』(普通『野史』と略される。嘉永五年成立)が利用されていることだ。本文天正十八年十一月十九日の所にこうある。

さて此の三興は勿論政宗の押へであるから、十分に戦を持つて、皆後へ向つて逆歩に歩み、政宗打つて掛らば直にも斬捲らん勢を含んで居た。逆歩に歩むとは記してあるが、それは言葉通りに身構は南へ向ひ歩は北へ向つて行くことであるか、それとも別に間隔交替か何かの隊法があつて、後を向きながら前へ進む行進の仕方が有つたか何様か精しく知らない。但し飯田忠彦の野史に、行布二常蛇陣とあるのは全く書き損ひの漢文で、常山蛇勢の陣といふのは、これとは異なるものである。

仮病を使い虎視眈々背後から狙う政宗勢に対する備えについて記す部分である。破線部で何の断りもなく「記してあるが」と自

然に受け入れているのは『氏郷記』の記述を指す。このように骨格的二史料の記述は普通出典を示さず扱われる。実線部から『野史』を見ていることは分かる。だがここでのニュアンスには、この史料をあまり信用していないらしい口振りが感じられる。政宗領を通過するとき氏郷たちが土民の冷遇にあつたことを記す箇所「蒲生家の士の正望の書いたものに「憎しといふこと限り無し」と政宗領の町人百姓の事を罵つてゐるのも道理である」とする扱ひには、『野史』とは対照的に、『氏郷記』の記述——政宗に謀反の思惑があつたことを強調しているのは本書である——が全面的ではないまでもこの辺については信頼できるといふ作家の判断が暗示されているようである。⁴⁾

蒲生家は寛永十一年に断絶したため、もともと氏郷について纏まつた叙述は少ない。⁵⁾ 勢い『氏郷記』に基づくのが殆どなのであるから、これが骨格的史料に選ばれるのは至極妥当なのである。問題は『藩祖実録』の方だ。政宗についての記述は多く、作品執筆時点でそれ以上に詳しい伝記も存在した(例えば『仙台藩祖成蹟』など)が、やはり露伴は本書に據っている。やや極端な箇所を見よう。天正十八年、秀吉東下が近づいた時点の記述である。

〈作品〉：正月、政宗は良覚院といふ者を京都へ遣つた。三月は斎藤九郎兵衛が京都から浅野長政等の書を持つて来て、いよ／＼関東奥羽平定の大軍が東下する、北条征伐に従はるべきである、会期に違つてはなりませんぞ、といふのであつた。

そこで九郎兵衛に返書を齎らさしめ、守屋守伯小関大学の二人を京へ遣つたが、(下略)

『藩祖実録』(原漢文表記)：是月、良覚院を遣はし京に之かし

む。三月、齋藤九郎兵衛京師より至り、浅野・木村諸氏の書を致す。曰く「関東征伐近きに在り、宜しく会期に違ふ勿かるべし。」と。公、書を裁し之に對へ、九郎に齋たらし往かしめ、又守屋守伯・小関大学をして京に之かかしむ。(下略)

表現を世話に砕き適宜語は補なわれるが、文脈はそのまま採り入れている。テンポの速い漢文体を写すことで、上方勢の接近に慌ただしくなった伊達家の雰囲気醸し出しているのである。無論これほど明白なのは稀で、作者は原典から自由に事件をピックアップし、時には他書と同様時間序列に構わぬ逸話的な取り込みにも利用する。その取り込みの順序という点では氏郷中心の部分に比して、政宗を巡る事件についてより自由度が大きく、逆に言えば後半の方が歴史的時間序列に沿う度合いが高い。さらに『実録』の方は●で示した後半での逸話の利用も多い。この相違が生じた理由も、『藩祖実録』を骨格的史料と見ることで説明がつく。実は此の書には頭書で見出しが与えられている。例えば、「天正四年 藩祖請_ニ先登_一」、「藩祖通_ニ信秀吉_一」、「徳川氏使玄越至_ニ(以上へく、くの内)、「藩祖学_ニ茶儀_一」(16)、「葛西・上杉弔_ニ大崎之敗_一」(22)、「寛永五年 台徳公臨_ニ藩邸_一」(21)と言う具合である。その逸話的にあらわれる記事にはこの見出しに一致するものが多い。頭書を目安にして手元で頁を繰りながら記事を持ち上げていく創作現場の事情も想像されるのである。

『実録』『氏郷記』はすでに一代記的歴史叙述としての文脈を持っている。適宜省略しつつも、作品は基本的にその流れに寄り添っている。その事情を以て基層的文脈を織りなすために利用されるものと呼んできたわけだが、同時に「表2」で見たとように作品

では実に様々な書が利用されてもいたのだった。それらの取り込まれ方には実に多くのバリエーションがあり、逸話的なもの、また各説をあるいは並置させ(9) あるいは併せて自らの見解打ち出し(5)(24)、あるいは自らの人物像にあう方(4) や面白い方(25) を選択するという具合で、殆ど分類不可能なほどその取り込み方は多様である。一例として(24)「須田伯耆の密告」を見よう。ここで密告した者が須田伯耆ともう一人であることは『野史』から取る(『氏郷記』は別の二人)。「蒲生氏郷記」は須田一人。須田の父の名が大膳であることは『野史』および『実録』から(蒲生側の記述には無い)である。だがなぜ須田が政宗を恨んだかという理由は「蒲生氏郷記」の記述に従っているものであり、須田が述べ立てる場面の叙述には『氏郷記』を採用する。

蒲生源左衛門は須田等を糺した。二人は証拠文書を攘つて来たのだから、それに合せて逐一に述立てた。大崎と伊達との関係、大崎義隆の家は最上義光を宗家としてゐること、最上家は政宗の母の家であること、母と政宗とは不和の事、政宗が大崎を圖つた事、そんな事をも語つたらうが、それよりは先づ差当つて、「揆を勧めたこと、黒川に於て企の事、中新田にて虚病の事、名生の城へ氏郷を釣寄せる事、四城と計を合せて氏郷を殺し、一揆の手に打死を遂げたることにせんとしたる事、政宗方に名生の城の落武者来りて、余りに厳しく攻められて相圖合期せざりしと語れる事等を書き立てた。

後半実線部は『氏郷記』の該当箇所を例の如く砕きながら写したものである。面白いのは破線部で、これは勿論露伴の想像である。これほどまで御家の事情が語られたことを記す史書など

はずはない。「語つたらうが」と推量の助動詞の使用でそれは示されてはいるが、後半の羅列形式に擬くことで連続して存在したかの如く印象づける言説上の操作がなされている。右に指摘したようにこの部分は複数史料を合成し、さらに自己の想像までを総合化して構成された叙述である。だが作品はそうした史料操作の痕跡を隠蔽させていた。何に據るかを解きほぐすことは、我々の側に任せられた作業だったと云わなければならない。

四 へ據つて語るのへいかに語るのへか

すでに前節の終わりに「へいかに語る」かの問題を避けられなかった。問題を二つの方向から論ずると云うのも、あくまで便宜上のものでしかない。次にその具体的様相を、ある場面についての分析から観察したい。取り上げたい箇所は多々ある。例えば政宗が小田原参陣を決意する家臣とのやり取りの場面。大峯金七の復命で、小田原参陣余儀なきかと云う際の伊達成実や片倉小十郎の語られ方は極めて生動感がある。そこで成実は主の言を制し「我が君今年正月七日の連歌の発句に、な、くさを一ト手によせて摘む業哉と遊ばされしは、仙道七郡を去年の合戦に得たまひしよりのこと、それを今更秀吉の指図に就かれうとは口惜しい限り」云々と滔々と述べ立てたとするが、こんな気の利いた台詞を吐く成実ももちろんどんな史書にもなく、『実録』での成実の発言の記述に別の箇所の詠歌の記述を吹き寄せて創案しているのである。随所に發揮されるこうした手腕を観察したいわけだが、ここでは作中最もサスペンスの色合いの濃い陣中茶席の場面を取り上げよう。ここでの史料は『氏郷記』一つであり、その意味では変化

に乏しい。だがそれだからこそ「へいかに語る」かの側面がかえって見やすいという利点があるのである。葛西大崎の一揆が起こつて、秀吉に「くせ者」（『野史』）と評された「不気味千万な怪物」である政宗を、同じ秀吉の命で土地案内者に立てなければならぬ状況に氏郷は置かれている。渋谷前を行く政宗軍を案内者であるという理屈で後押しすることで全軍が進み、伊達領通過に際しては、冒頭へい〜で紹介された人民の冷遇を受ける寒中の行軍がある。そういう政宗たちの敵意の雰囲気は満ちた叙述がたっぷり続けられた後に配された、茶の湯への誘いなのである。けれども氏郷はその申し出を平然と受け入れたのだった。

イヤ驚いたのは家来達であつた。政宗謀叛とは初めより覚悟してこそ若松を出たれ、と云つた主人が、政宗に招かれて躰り上りから其茶室へ這入らうといふのである。若し彼方に於てあらかじめ大力手利の打手を用意し、押取籠めて打つてか、らんには誰か防ぎ得よう。（中略）こは是一期の大事到来と、千丈の絶壁に足を爪立て、萬仞の深き淵に臨んだ思がしたらう。飛んでも無い返事をして呉れたものだ、恨みもし果れもし悲みもした事であらう。然し忠三郎氏郷は忠三郎氏郷だ。しほらしく茶を習うたる田舎大名が、茶に招くといふに我が行かぬ法は無い、往いて危いことは有るとも、招くに往かずば臆したるに当る、機に臨みて身を抜はうに、何程の事が有らうぞ、朝の茶とあるに手間暇はいらぬ、立寄つて政宗が言語面色をも見て呉れう、といふのであつたらう。

ここで語られる家来達の振る舞いは藍本にはなく、氏郷の承知の旨の返事、この茶席が彼を討ち果たす謀事であつたことが記さ

れた後で、すぐに、「氏郷ハ、爰ニテ彼ガ館ヘ行ズンバ定テ不覚者ト思フベシ。何程ノ事カアラン、立寄テ彼ガ気色ヲモ見シ」という決意の言が続けられている。つまり史料の行間に氏郷が啖呵を切った背景を読みこむべく、家来達の驚きと慌てふためく姿が語られているわけだ。そしてそれと対比的に氏郷の勇敢で誇り高い様が浮かび上がる仕掛けである。傍点部に見られるように、ここでは推量表現の利用でそれが想像であることを示している。だが興味深いのは、事態が切迫した次の場面では推量表現の形式に拘泥していない点である。というより、正確にはそのことで切迫した雰囲気を生産していると云うべきか。原文は次の通り。

氏郷数寄屋ノ路地ヘ入シカバ則戸ヲ立ントシケルヲ、蒲生源左衛門（以下六名略―論者）ナド云一人當千ノ侍共無理ニ押破リテ、我等ハ何國ニテモ氏郷ノ相伴ニハツレヌルコトハナキ者ヲトテ鎧着ナガラ主従七八人座敷ニ押直リタル

いよいよ危険な香りのする茶室の潜門くぐりを入ると、向こうはとたんに扉を閉てたわけである。

伊達の家来は此は狼藉に近き振舞と支へ立てせんとした。制して制さる、男共であればこそ、右と左へ伊達の家来を押退け押飛ばして、楯に取る門の扉をもメリ／＼と押破つた。氏郷の相伴つかまつて苦しい者ではござらぬ、蒲生源左衛門罷り通る、蒲生忠右衛門罷り通る、町野左近将監罷り通る、罷り通る、罷り通る、と陣鐘のやうな聲もあれば陣太鼓のやうな聲も有る、陣法螺吹立てるやうな聲も有つて、間隔たつたる味方の軍勢の耳にも響けかしに勢ひ猛く挨拶して押通つた。茶の道に押掛の客といふも有るが、これが真個の押掛

けで、もとより大鎧こて罩手て當あての出で立ちの、射向けの袖に風を切つて、長やかなる陣刀の鎧よろいあたり散らして、寄付よつきの席に居流れたのは、鴻門の會に樊噲が駆込んで、怒眼を圓に張つて項王を睨んだにも勝つたらう。

場面は具体的に状況化され、忠義の猛者達が門を蹴破る音や挨拶の怒鳴り声などを読者の耳に響き渡らせる。作者は史料を核としてその想像力の羽をゆつたりと伸ばすのであった。戦国の世に生きる男たちを現前化すべく史料の可能性を開示し、読者をそこに連れていくのである。最後で『史記』の樊噲の故事を持ち出すのは『氏郷記』の前引箇所が続けて、「アツバレ異國漢楚ノ戰ニ楚ノ項羽漢ノ高祖ヲ新豊ノ鴻門ニテ討タントシ給フ時」云々と讃辞のために引かれているのを採り入れている。想像と引用とが極めてなめらかに、同列に連続する語り口がなされているわけだ。想像力が叙述を引き延ばし、そこに現場的リアリティーを生み出す方法は、場面状況に即する文脈では一貫して見られる。例えばこの後で氏郷が命保つて外に出るのを可能にした、毒に備えた機略の件がある。原典では「被戻テノ後西大寺ヲ用テ思ヒノマ、ニ吐レシカバ敢テ大事ハナカリケリ」とあるだけのものだが、作者はそこにやや芝居めいた口調を混ぜて十倍以上の量の一段落を形成させているという具合なのである。

これは歴史的事件の時間軸に沿った方向からの観察であった。もう一ついわば時間軸と無関係に派生的に滑り出していく特徴的な叙述法がある。それは第一節の語り出しを見た所で、すでにその顕著なあり方を見た連想による言説の引き延ばしである。先の引用破線部の茶道用語に掛けた「これが真個の押掛け」だという

洒落もそのささやかな例であった。政宗の毒飼疑惑から連鎖的に、この時代にはそれが頻繁に行われたこと、クレオパトラのこと、後の武士が毒から身を守るため印籠にウニコール・緒締に珊瑚珠を用いたこと、政宗自身が米沢城で毒飼の危険に曝されたこと、後に秀忠を饗膳したときのこと、前田利家が針医伊白を遠ざげたこと、加藤清正毒饅頭のこと、これだけで一段落分である。氏郷や政宗を評する言の間に、毒を巡って縁起的に顯れたこれら事項が次々挟み込まれることで叙述は引き延ばされている。だがこれはただの気まぐれな饒舌ではないはずである。

その段落で注意されるのは政宗の疑惑に対する語り手の立場の曖昧さである。なるほどもし政宗の毒飼が真実なら政宗の器量が下がるから、「政宗の為に虚談想像談で有つて欲しい」とし、「政宗が氏郷に毒を飼つたことは無かつたとしても、蒲生方では毒を飼つたと思つても強ち無理では無く」とか、「政宗が毒を使つたといふ事は無くても、氏郷が西大寺を飲んだといふことは存在した事実と見て差支あるまい」と締めくくっているのは、一見明らかかな否定的判断に立つかの如きに思える。だが子細に眺めるとここでは「欲しい」という願望や、「しても」という仮定表現が使われており、実は判断は保留されたままなのだった。作者自身の見解は、隠蔽されていると見るべきではないのか。

そもそも政宗にはもう一つの疑惑があった。それは茶席で高清水まで敵城は無いとした情報が全くの虚言だったというものだ。叙述を遡ると両疑惑について、「謀るところ有る為に偽りを云つたと蒲生方では記している」とあり、また「毒を仕込み置いたる茶を立て、氏郷に飲ませた、と云はれてゐる」とするよう、語

り手は自らの據る『氏郷記』の記述をここでは伝聞的に保留して扱っている。どんな歴史叙述も語られる立場のイデオロギー性から自由ではあり得ないから、それに対する配慮ではある。だが虚言の疑惑に対して「殊更に虚言を云つたのか、精しく情報を得て居なかつたのか分からぬ。次いで起る事情の展開に照らして考へるほかは無い」としながら、それを後に考えて結論を出すことはしていない。両者は共に作家の判断の隠蔽性が予想されるといふ形に於いてパラレルな関係にあるのである。

問題は叙述をさらに遡つたところで、一揆蜂起を記述する際の語り手は、「少なくとも大崎領に政宗の電話が開通して居たことは疑い無い」と、政宗の一揆勢との内通を断定している点だ。また、後では名生の城で攻撃にあつて政宗の情報が「真赤な嘘」と分かつた箇所、当時忍びの者が活躍したという話を混ぜつつ、氏郷は必ずこの事実を必ず知っていただろうともしている。余所の氏郷に分かりながら、地元のそして内通もあつた政宗に分からぬ事は有るまい。結論を言い切つては無いながらも、作品は自ずと読者を虚言の事実という推論に導く文脈の流れを持っており、文脈に潜められた形で、かくなる判断が表明されているといつて良いだろう。パラレルな関係の一方がそうであれば、もう一方の毒飼についての判断が文面上否定的に見えたのも怪しいと印象づけられざるを得ない。それに、もし政宗が毒を利用したなら劇毒ではなく二三日後になつて効くような緩毒であつたらうという類の考証を作家はなしているが、このような事態を具体化する説明化は、かえつて毒飼の事実にリアリティーを与えるようなものでしかないではないか。政宗の疑惑に関して露伴自身の胸中の判

断は黒と出ていたものと見てよいようなのである。

中野好夫は露伴史伝を「英雄豪傑のアパタを探しだして、これを卑小化凡人化するのではなく、英雄はあくまで英雄に、豪傑はあくまで豪傑にえがく」と評している。彼らを糾弾し偶像破壊するのが作家の趣味でなかったのは確かだろう。だから言説上それはほのめかす程度に抑えられた。もちろんここで問われるべきなのは、それでいかなる効果が生じるかである。かくなる含意が読みとりうる点と、一方では政宗が立派な武将として賛美されている点を、読者はいかに総合化しよう要請されているのだろうか。論者は先に触れた毒を巡る連想的叙述こそ、その鍵となるものと考ええる。それは事実の列挙によって、この時代いかに毒飼が頻繁に行われたかを証し立てるものであった。語り手は此の言葉が「時代の匂ひを表現してゐる」とまで云う。政宗ほどの武将でさえ、毒飼という「人間の考へ出したことの中で最も醜悪卑劣の事」をするような、謀略が蠢き、裏切りが横行し、私欲のための殺人が日常化した「恐ろしい世」であったことが、自ずと読者の心に染み通るような仕掛けが施されていたのではないか。時間序列的な展開と理想派生的な雑談との一見異質の文脈が、読者の側で因縁和合的に交叉・結合することで、時代の空気が行間に匂い立つような効果が狙われた言説構成なのである。

作家露伴の理想能力は強大であり、一つの〈事〉が放射的に分岐し、他の〈事〉に連結される。その多方向性に撤すれば、いくつかの史伝作品と同じく全く人物評論的なものとして書くことも可能だったろう。だが本作では二節で見たような時間構成の見取り図が、かなり明確に存したものと思われる（表→参照）。恐

らくそれを可能にさせたのは、前節で指摘したすでに歴史叙述として構成された骨格的な二史料を前後に配し、比喩的には〈図1〉の二つの円に充填するように、全体の巨視的展望の見通しを容易にし得たからだろう。両書は話を本筋に引き戻させるものとして機能し、連想的飛躍と歴史的序列性の融合的共存を可能にしたのである。ここで冒頭の方法宣言に立ち戻って、「評釋的に述べ」とも云われていたのを思い出そう。作品は、作家の文献史料に対する柔軟な引用・解釈・説明・敷衍・想像・考証が成熟した語りの文体で一体化されていた。史料とそれへの読解作用の間を自由に往還する場で、いわば〈読む〉ことがそのまま〈書く〉ことであるような立ち現れ方をしている。これこそ評釋的な方法と呼ぶべきものの実態だったと云える。何かに〈據り〉、その可能性を開示し、複数文脈の交叉に於いて言外の意味を読者の側に醗酵させることをも狙うという方法が、ここに提示されているのである。

五 時代認識と終わり方の問題

その方法宣言では「歴史家は歴史家だ、歴史家くさい顔つきはしたくない。傳記家と囚はれて終ふのもうるさい。考証家、詮索家、古文書いぢり（中略）然様いふ者の真似もしたくない」とも云われていた。あたかも考証や詮索などのような不粹なことなど、自分の知ったことではないと言いかのごとき口吻である。しかし露伴という作家においては、文学者としての物語構想力や詩的感性などが、深い学識に基づく考証性・批判性などの学者的洞察力と融合し、かつ相互に支え合っている所に、その奥深い魅力の

一端が存する点は恐らく認めて貰えるだろう。作家の歴史に対する見識は本作にも当然盛り込まれており、史料選択などについても作家なりの判断が働いて居たと見て良い。例えば三節で述べたように政宗との対立が描かれる後半は、主として『氏郷記』の記述に沿い、蒲生側の立場から語られている。ここで『藩祖実録』など伊達側の記述を採用しない理由は何か。一揆煽動、虚言、毒餌という疑惑をもたれる不穏な動きをしてきた伊達勢である。こちらにはそれなりの負い目があり、それだけ情報工作がなされる可能性は高い。小田原参戦での内股營業以来、政宗の胡散臭さが語られてきた作品の流れと照応させるとき、言外のかくなる判断を想定するのは妥当なことと思われるのである。

奥羽の一揆が終結し「腫物の根が抜けたやうに全く平定」した後、前田利家が氏郷と政宗の間を調停する話(26)が置かれている。この場面はこれまでの展開と時代の捉え方を象徴的に総括する。この席に政宗は長さが一尺八九寸もある朱鞘の大脇指をさしてきた。まだ若盛りの政宗だからと、これを「使ふつもりで無くて何で有らう。使ふつもりである、ほんとに使ふつもりであつたのである」と語り手は評する。これまで政宗を怪しく感じるよう方向付けられてきた読者には、かくなる彼なら天下取りの野望のため、毒をも「ほんとに使ふつもり」があつたとて不思議ではないだろうという印象を与えられよう。彼は利家の「政宗殿にはだてなる御ん仕立」という皮肉に「遠国に候故」と答へ、「謹んでおとなしくした」と語られる。若くて血気盛んな田舎者の政宗と、臆長けて威厳の備わつた利家という取り組みである。前者は戦国の世のまさに戦国性を、後者はそれを鎮め統一へ向かう平定

力を象徴する。ここでは一旦前者が後者に屈服される形である。さすがの伊達者も以後謹んだというわけである。

そうした時代認識の根底には、あの繰り返し現れる沸る湯のイメージ・モデルがあつた。

また人の世といふものは、其代々で各々異なつて居る。自然そのまゝのやうな時もある。形式づくめで定まりきつたやうな時もある、悪く小利口な代もある、情欲崇拜の代もある、信仰堅固の代もある、だらけきつたケチな時代もある、人々の心が鋭く強くなつて沸りきつた湯のやうな代もある、微菌のうよづくに最も適したナマヌルの湯のやうな時もある、冷くて活気の乏しい水のやうな代もある。其中で沸り立つたやうな世のさまを觀たり語つたりするのも亦、面白くないこともあるまい。

水がその姿を変へる様に時代にはそれぞれ特有の相がある。時代様相の変遷に水の状態可変性が比喩として重ねあわされているわけである。政宗を戦国気風の強い存在にし、またそうさせる史料を選択していたことは、一節で指摘した全国統一と安定を象徴する検地や刀狩が語られない事情と同じ方向の上にあるものだろう。つまり「沸りきつた世」とイメージされた時代相の方向に沿うように物語られるのであり、こうした政宗像も英雄豪傑たちの力動の火花が飛び散るこの時代に置くにふさわしい選択だといえよう。いわば時代状況の孕む危険性の局面で切り取られた政宗像なのだった。「まだ泰平の世では無い、戦乱の世である」という言葉が彼を評する場所に添えられる所以である。

語り手はこの「沸りきつた湯のやうな代」に対し両面的な態度

を示す。それは「黴菌のうよづくに最も適したナマヌルの湯のやうな時」と対置するとき「潔い世」という肯定的意味を引き出し、それに何より「冷くて活気の乏しい水のやうな代」と対置されるこの時代の活気においてこそ、氏郷や秀吉のやうな巨人も生まれ得たのである。だが彼らを産んだこの時代はまた「恐ろしい、そして馬鹿げた世」なのでもあった。そして、これまで見たように作品の文脈に隠微に提示されてきたのはむしろこの「ひどい世」の側面だった。この二面性の事態は、作品がトピックの選択により異なった色合いを生じさせるアイロニカルな構造を持ったものと捉えることで理解されるだろう。個々の英雄を英雄として語るものとして読んだなら、まるで英雄賛美の物語でしかないように見える。だがこれをより巨視的に時代の有様を語るものとして、つまり時代相を顕在化させて読んだらどうか。「沸りきつた湯」は甚だ危険なものでもある。秀吉の全国統治は奇跡的に速やかになされたが、あたかも湯を無理に抑え付ければ、蒸気が蓋を押し破り溢れ噴き出すように、有り余つた時代のエネルギーは朝鮮侵略という形で噴き出さざるを得ないことにもなった。物質の物理現象的な力動性が、歴史を鳥瞰する視点に、具象的なイメージ・モデルとして詩的な一体化を遂げている形の歴史認識のありようを想定することができるのである。

その秀吉に対する判断のあり方は興味深い。政宗について曖昧だったのと対照的に、秀吉の氏郷毒殺説は毅然として拒否している。この自信はどこから来るものなのか。掉尾の段に「政宗をさへ羽柴陸奥守にして居る太閤が、何で氏郷に毒を飼ふやうな卑劣狭小な心を有たう。太閤はそんなケチな魂を有つては居ぬ人と思

はれる」とある。あまりに人物論的な判断に見え主観的過ぎると思われるかも知れない。だがここでも手続きは隠蔽され、主観的・感情的であるかのごとき見せかけて表現されたのだろう。

太閤が氏郷を忘れて石田三成と直江兼続の言を用ゐ、利休の弟子の瀬田掃部正忠に命じて毒茶を飲ませたなどと云ふのは、実に忌々しい。正忠の茶に招かれて、帰宅して血を啗いたことは有らうが、それは病気の故で有つたらう。無い事に證據は無いものであるから、毒を飼はなかつた證據は無い譯だが、太閤が毒を飼つたといふことは信ぜられない。太閤が然様なことをする人とは思へないばかりで無い、然様なことをする必要が何処にあるであらう。氏郷が生きて居れば、豊臣家は却つて彼様にはならなかつたであらう。氏郷が利家と仲良く、利家は好い人物であり、氏郷と家康とは肌合が合はぬのであつた。然様いふことを知らぬやうな寝惚けた秀吉では無い。批判対象にされた記事は『野史』のものだが、この「忌々しい」は秀吉の体面を傷つけたことに対してではなく、まことしやかに氏郷毒殺説を再生産する歴史叙述者の無反省さに対するものである。毒殺説はかなり広く行われていたが、少し史料に当たればすぐ気づかれるのは、これが江戸時代以降になされた歴史叙述にばかり散見するという事実である。『氏郷記』も寛永十年まで記述されているからこの点では同じ。同時代人の記述したものはむしろ太閤と氏郷が「心安き間がら」（『老人雑話』）であることや、また曲直瀬道三の『医学天正記』には、病を得た氏郷のために諸医の手配など手を尽くす太閤の姿も記されている。こうした傾向に露伴が気づかないはずはない。この点を疑つた先例は岡

本保孝の『難波江』に「道三が配剤録（『医学天正記』と同じく引用者注）にてみれば、太閤も氏郷の所労を心苦しうおぼしたる趣なり。（中略）そも御、当家にては、たれとはなしに石田をばあしきさまにいひ思ふなれば、不根の説を伝へたることもありぬべし」とすでに備わる。徳川の代になって三成を悪く云うイデオロギー的偏向と結びついて派生したというわけだ。露伴もこのあたりを真相として見当はつけていたのではないか。

引用後半傍線部は当時の政治状況の適切な要約でもある。秀吉ともなれば、豊臣政権を安定させるのに何が最善の道であるかぐらい熟知していたというわけだ。これは「表2」⑨の秀吉が氏郷を会津に任ずることになった経緯の三説を並べた件で、『野史』に拠る第二の説に對し、これでは秀吉の眼力が疑わしくなると云う理由から「面白く無く思はれる」、「此談も些受取りかねる」という否定的評価を与えているのと軌を一にするものである。氏郷が居てこそ豊臣家は安泰たりえたのだが、惜しむべし四十歳の若さで病没した。戦国性と近世性、また西国勢と東国勢の危うい勢力均衡にあつた流動的なこの時期では、状況はどう動くか知れたものではない。作品は氏郷没後、蒲生家や豊臣家の行く末を何も語らない。氏郷の一代記だからと言えばそれまでである。だが氏郷がいれば家康に對抗しえたことをほのめかし、また利家の卓抜な調停力を逸話として語り終わる本作は、氏郷が天逝しているなれば、利家にあと少しの余命があれば「云々」というイフの歴史に誘う。可能性の束としての歴史現場のあり方に置き去りにすることで流動性の断面を示しつつ、イフの余韻を読者の耳に残響させたまま幕は閉じられていたのだった。

※露伴作品の引用は『露伴全集』（岩波書店）による。傍点傍線は論者による。

注

- (1) 井田卓「蒲生氏郷——露伴の方法について——」（比較文学研究）二六号。昭和四九年十一月）に同様の指摘がある。
- (2) このことは露伴の水についての多くの文章や、幸田文の回想「水」（「こんなこと」昭和二五年）などで窺われる。
- (3) 「仙台藩祖実録」は柳田泉の「露伴先生蔵書瞥見記」で作家の所蔵が確認されている。露伴の所蔵していたのは明治十三年刊の刊本と推測される。
- (4) 『野史』が集中的に利用される「表2」⑥⑧で、「…と云はれてゐる」「…とされている」と言った伝聞形式の利用により、その記述に對する距離感を取る利用の仕方をしていゝことも、『野史』に對する作家の態度を示すように思われる。
- (5) 他に史籍集覽所収の「蒲生氏郷記」があり、露伴も利用しているが、これは氏郷の戦功や逸話を断片的に記したもので、体系的な歴史叙述とは云えない。また「蒲生軍記」と言うものもあるが、これは『氏郷記』を部分的に省略し文章を多少改めたりライト版といえるもので、その内容は『氏郷記』に包含される。本作では『軍記』に省略されている箇所も採り入れられているから、作家が『氏郷記』に據っていることは明らかである。
- (6) 井田卓氏は注(1)論文で「政宗がわずか十歳の時に先鋒となることを父に請うたというアネクドットを露伴は感心して話している。しかしこれは天正十年、政宗十六歳の時の話として伝わっているのを、露伴が間違つて記憶していたらしいのだ。」とされているが、むしろこう

した点の一致は露伴が『藩祖実録』に據っていることを証拠づけるものと見なして良からう。「天正四年」なら政宗は十歳のはずだからである。

(7) 井田卓氏の注(1)論文に、この場面が『藩祖実録』に基づくことについて指摘がある。

(8) 現代文学大系3『幸田露伴・樋口一葉集』(筑摩書房。昭和四〇年三月)「解説」

(9) こうした態度表明は史伝物第一作である「頼朝」(明治四十一年)の「引」に「無論歴史家の領域に入つて其の真似を為たのなどでは無い、言はゞ頼朝に關した一夕話を試みたといふ迄のものなのである」とあつて、作家に一貫していたものである。

(10) このような観察は当時のイエズス会宣教師の記録に見られる。一五九五年二月十四日付のオルガンティーノ書簡で、秀吉は氏郷が危篤であると云う報告を受け取ったとき、「もし飛驒殿が現世から亡くなれば、子は子の跡継ぎたちに専制主を存続させるべきすべての希望をすでに失つたことになる」(松田毅一監訳『十六・七世紀イエズス会日本報告集 第一期第二巻』。昭和六二年九月)と落涙しながら云つたとされる。露伴がこれを知っていた証拠はないが、実弟の幸田成友が日歐通交史に詳しかったことを考えあわせれば何らかの情報を得ていた可能性はある。

(本学大学院博士課程)